

大隈重信没後百年記念式典

「大隈と福澤の交流を読み解く—近代日本の政治と経済—」

「明治十四年の政変」をめぐる大隈と福澤

2022. 1. 10 大日方純夫

はじめに

・大隈と福澤— 2人をよく知る矢野文雄の談

「一方は学者であり、一方は政治家であると云ふ丈で、其性格はよく似て居る、恐らく福沢先生を政治家にすれば大隈重信であり、大隈さんを学者にすれば、福沢諭吉が出来たらうと思はれる。」〔松枝保二編『大隈侯昔日譚』報知新聞社出版部、1922年〕

・「明治十四年の政変」

大隈の一大転機—政府のトップから“謀反人” に

(→立憲改進黨結成・東京専門学校開校)

近代日本の一大転機—国会開設の勅諭

(→大日本帝国憲法制定・帝国議会開設)

↓

◎「明治十四年の政変」をめぐる大隈と福澤

大隈と福澤の関係が、日本近代史上、どのような政治的意味をもったか

* 早稲田大学編『大隈重信自叙伝』(岩波文庫)

「我輩が反乱を企てたと云う訳で、我輩トウトウ謀反人になってしまった。しかもこの大隈の謀反の裏には福沢諭吉が参謀となり、軍用金は三井、三菱が出しているとまで政府側では言い出した。」

* 福沢諭吉著『福翁自伝』(岩波文庫)

「風聞の一、二を申せば、全体大隈というのは専横な男で、様々に事を企てるその後ろには、福沢がいて謀主になっているその上に、三菱の岩崎弥太郎が金主になって既に三十万円の大金を出したそうだなんて、馬鹿な茶番狂言の筋書みたようなことを触れ回して、ソレカラ大隈の辞職と共に政府の大方針が定まり、(略)」

(0) 大隈と福澤の出会い

1873 (明治6) 年頃、上野の天王寺辺の薩摩人の宅で逢う〔以下、早稲田大学編『大隈重信演説談話集』(岩波文庫) 収録の「福沢先生の処世主義と我輩の処世主義」による〕

・それまで

「気に喰わぬ奴だ、生意気な事をいう奴だと腹で思うばかりでなく、口に出してもいったものだ。」〔犬猿の間柄で、一方は民間学者の暴れ者、一方は役人の暴れ者〕

・その時

「我輩は三十五、六、先生は四十になるかならぬかだ。これは福沢だ、これは大隈だというので引き合わされて名乗りあって、不思議な所で初対面が済んだが、漸々話し込んでみると元来傾向が同じであったものだから犬猿どころか存外話が合うので、

喧嘩は廃そう、むしろ一緒にやろうじゃないかという訳になって、爾後大分心易くなった。」

・それから

「義塾の矢野文雄、故藤田茂吉、犬養毅、箕浦勝人、加藤政之助、森下岩楠などいう連中が我輩の宅に来る様になって、到頭何時の間にか我輩の乾児になってしまった様な訳だ。」

* 早稲田大学編『大隈重信自叙伝』(岩波文庫)

「三田の福沢〔諭吉〕君とも親しく交わり、その門人連とも接近するようになり、その門下生を我輩に頼まれたので、この際矢野文雄、中上川彦次郎、小泉信吉を始めとし、漸次に慶應義塾出の秀才が十幾人入ったのである。その内の一番年少が犬養〔毅〕、尾崎〔行雄〕であった。」

(1) 新聞発行計画をめぐる大隈と福澤

1880 (明治 13) 年

12 月初旬、福澤に対し井上馨、政府系新聞の発行につき打診

福澤、大隈邸に招かれ大隈・伊藤・井上と新聞発行について相談

年末、福澤、「時事小言」の執筆に着手

1881 (明治 14) 年

1 月、福澤、断るつもりで井上邸を訪問。井上が国会開設の意向と政府の内情を打ち明けたため、受諾を決意

〔以下、政変後の 10 月 14 日付井上・伊藤宛福澤書簡と福澤の手記「明治辛巳記事」による〕

1 月下旬、伊藤と大隈・井上は熱海で会合し、国会開設問題、新聞発行などについて意見交換 (熱海会議)

2~3 月、福澤、大隈を訪ねて新聞紙発行のことについて相談し、国会開設の方法・時期について尋ねる

大隈：「中々大事なれば名言し難し、今正に伊井二氏と相談中にして二氏も亦非常の尽力、鹿児島参議へも頻に説得中なれば、漸次進むあるも退くなし」

3 月 10 日、福澤、執筆途中の「時事小言」の一部を大隈に届ける

(自分の「国会論中の一段」で、大隈の考えと違いはないはず)

(2) 大隈意見書とその背後関係—三田派との関係

3 月、大隈、左大臣を介して意見書を提出 (矢野文雄が起草)

イギリス式の議院内閣制 (政党内閣制) を提起

国会開設の日程 (明治 14 年憲法制定→16 年初国議院開会)

4 月、『交詢雑誌』、憲法案を掲載 (起草者：小幡篤次郎・矢野文雄・馬場辰猪ら)

イギリス流の議院内閣制構想

* 交詢社 (福澤とその高弟約 30 人が中心となって 1879 年 9 月に結成)

慶應義塾卒業の官吏・記者・実業家・教育者・地主など会員 1600 人 (1881 年)

5 月 20 日～『郵便報知新聞』(慶應義塾系)、憲法案を連載

(3) 憲法構想の対抗—岩倉憲法意見と「福沢ノ私擬憲法」

6月22日、井上毅、岩倉具視に「憲法起草手續ニ付意見内啓」を提出

井上「(大隈意見書の主義) 全ク英国ニ依リ、改革セントスルモノ」
「容易ナラサル」—イギリス：主権は議会(国王は「虚器」)

7月4-5日、大隈、伊藤邸を訪問、話し合うも結論出ず

伊藤「今般ノ挙、実ニ愚ト云フベシ」「軽率ノ挙動、尤モ怪シムベシ」
「福沢ノ私見国憲ヲ見ルニ、君ノ建白ト同一ナリ、隠スペカラズ」

7月12日、井上毅、伊藤に宛て「内陳」を提出

「国会請願ノ徒」—「福沢ノ私擬憲法」を「根」にして憲法研究
「福沢ノ交詢社」—「全国ノ多数ヲ牢絡」「政党ヲ約束スル最大ノ器械」
「無形ノ間ニ行ハレ、冥々ノ中ニ人ノ腦漿ヲ泡醸」
「主唱者ハ十万ノ精兵ヲ引テ無人ノ野ニ行クニ均シ」
「英国風ノ無名有実ノ民主政」(「英国風ノ憲法論」)か
「普魯西風ノ君主政」(「政府主義ノ憲法」)か

(4) 政変から政変後へ—政府からの大隈追放と福澤

7月26日以降、開拓使官有物払下げ、新聞で問題化

7月30日、天皇、東方・北海道巡幸に出発(大隈ら随行)

8~9月、開拓使官有物払下問題をめぐる政府批判、激化

10月1日、福澤、巡幸先の大隈に手紙

開拓使問題で騒然としているのは「三菱と五代と利を争ひ、大隈と黒田と権を争ふより生じたる者にして、云はゞ一場の私闘たるに過ぎず云々」という説が「随分官海」に流行—これは「或る人々」の口実にもなっている模様

「世上の民権論は全く顛覆論に性質を改めたるが如し」—「官民益反離して其極度或は流血の禍如何と心配」

「新聞紙発行と地方への人員派出は必要」「一日を後るれば一日の損失」
仮綴りの『時事小言』5冊、同行中の「誰彼」に「分予」を期待

10月8日、井上毅、岩倉具視に手紙

現在、立志社その他「昨年之請願連中」は、府下で「国会期成会」を開催、福沢は盛んに急進論を唱え、その党派は三、四千に満ち、広く全国に漫遊して、すでに鹿児島内部にも及び、その他各地方はこの二、三日来、「結合奮起之勢」となっており、このまま経過すれば「事変不測」

10月9日夜、福澤、井上に翌朝是非会いたいと申し入れ

10月10日朝、福澤、井上邸に「押参」る

10月11日、天皇、還御、深夜に御前会議

10月12日、開拓使官有物払下げ中止+国会開設の勅諭+大隈の“追放”

おわりに

「明治十四年の政変」
→大隈の政府追放→立憲改進黨結成
東京専門学校開校

⇒大日本帝国憲法
《国会開設》
→早稲田大学

⇒日本国憲法→
→議院内閣制→
→

・福澤の最期と大隈

1901（明治 34）年 2 月 3 日、逝去（数え年 68 歳）

* 大隈「福沢先生の処世主義と我輩の処世主義」（『大隈重信演説談話集』、初出は 1908 年）

「先生と我輩とは一心同体にして社会に尽すべき約束がある如くにさえ感じたのだ。
それに今や先生がおられぬのであるから、二人の荷物を一人で背負うが如き思いで
心私かに安からぬものがある。」

・大隈の最期

1922（大正 11）年 1 月 10 日、逝去（数え年 85 歳）

【主要参考文献】

- ・大隈重信「福沢先生の処世主義と我輩の処世主義」（早稲田大学編『大隈重信演説談話集』岩波書店〈文庫〉、2016 年）
- ・大隈重信「大隈侯昔日譚」（早稲田大学編『大隈重信自叙伝』岩波書店〈文庫〉、2018 年）
- ・福澤諭吉「明治辛巳紀事」（『福澤諭吉全集』第 20 巻、岩波書店、1963 年）
- ・福澤諭吉書簡（明治十四年十月一日）大隈重信宛（『福澤諭吉書簡集』第 3 巻、岩波書店、2001 年）
- ・『井上毅伝』史料編第四（國學院大学図書館、1971 年）
- ・『大隈重信関係文書』9（みすず書房、2013 年）
- ・大日方純夫「自由民権運動と明治一四年の政変」（『講座明治維新 4 近代国家の形成』吉川弘文館、2012 年）
- ・大日方純夫「大隈重信政府追放の真相を探るー「明治一四年の政変」再考」（『早稲田大学史記要』第 44 巻、2013 年）
- ・久保田哲『明治十四年の政変』（集英社インターナショナル〈新書〉、2021 年）